来さのせぇ
奥多摩
《第49号》
平成30年4月1日
(一社)奥多摩観光協会

写真「カモシカ：大加林道にて」 ガイド 本渡 康隆

「日本一観光用公衆トイレがきれいなまちを目指して」の取組の紹介

奥多摩町では、「日本一観光用公衆トイレがきれいなまちを目指して」町内の観光用公衆トイレ（以下トイレ）の管理、清掃等の取組みを行っています。

平成２９年度より、町内に４１箇所あるトイレのうち使用頻度の高い２０箇所を奥多摩総合開発㈱へ「クリーンキーパー」として一括清掃委託を行い、これらを巡回しながら清掃を行っています。便器や手洗い場、床などを用途に合わせた洗剤や、清掃用具を駆使しながらトイレの美化と、清潔さを保ち、また併せてトイレ周辺のゴミ拾いなども行っています。

町内のトイレは広範囲に亘ることから、クリーンキーパーのために専用軽自動車２台を配備しましたが、クリーンキーパーの工夫により、清掃用具の車内収納棚を整備し、町の観光パンフレットや、イベントのチラシを置くパンフレットラックを取りつけて、配布するなど観光案内も行っております。クリーンキーパーの導入初年度から「トイレがきれいになった」と多くの声があり、励みとなっています。

今年１月２５日、東京都心の最低気温は、４８年ぶりに氷点下４度を観測し、記録的な冷え込みとなったことが報道されました。奥多摩町でも、氷点下１０度を下回った場所があり、トイレ１１箇所において水道管の破損や凍結などが起こり、当分の間、使用停止となった箇所もありました。

今後、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックの開催までに、町内トイレの改修が必要な箇所の洋式化、質の高い清掃など、「日本一観光用公衆トイレがきれいなまちを目指して」取組みを行っております。

町の重点事業である観光の取組をご紹介させていただきました。

（奥多摩町観光産業課長　天野成浩）

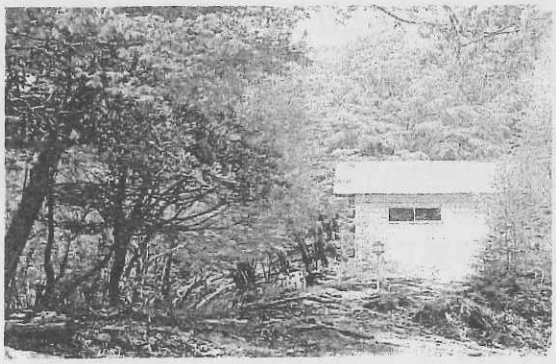
～とっておきの山歩き～

＜ミツドッケ(天目山)のツツジ＞

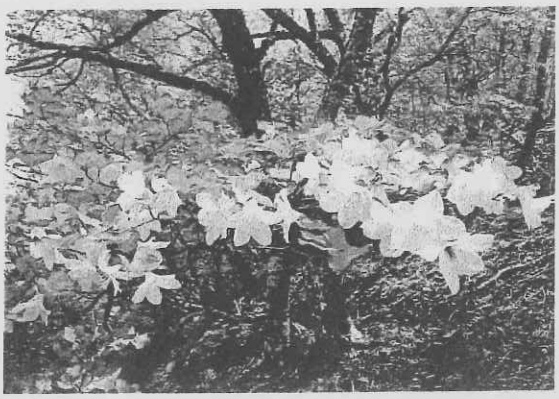
ミツドッケのドッケとは「尖った峰」を言い、長沢背陵の東に位置し三つの峰からなる標高1,576mの山で、山頂下には一杯水避難小屋と水場がある。ミツドッケへは東日原のバス停からヨコスズ尾根を登るコースが最短です。この山頂は 12年程前までは展望のない山と紹介されておりましたが、とある方が無許可で数百本もの木を伐採したため現在は眺望の良い山となりました。私は、以前山頂でこの方に出会い話をしております。

＜シロヤシオツツジの当たり年 2016. 5. 19 のメモ＞

東日原のバス停で下車し裏手の登山口から、日原の集落を下に見ながら登り最後の民家を右に、また、水道の配水タンクを左に見て急峻な植林帯を登ることバス停から約 30 分。大きな樅の木が数本あるところで着衣の調整と水分補給で休憩。右手正面には奥多摩工業の立入禁止のフェンスがあります。ここを出発すると間もなく足元は石の道、右上部は広葉樹林で少し歩くと尾根筋に、斜面も少しなだらかで気持ち良い林の歩行となります。ここを抜けると登山道を挟み上側は広葉樹林、下側は植林帯がしばらく続きテレビの地上波の中継アンテナを右手に見て、滝入ノ峰の中腹の岩が点在する道を登ると展望の良い狭い尾根に出ます。この付近は大きなブナ等が連立するヨコスズ山の尾根で、しばらく尾根歩きを楽しんでいると、左手にシロヤシオツツジが見られ、まもなく一杯水避難小屋（トイレ有）に到着。広場左にはミツバツツジが出迎えておりここで休憩。



小屋西側の酉谷山へ向かうルートから、ミツドッケへと歩行を進めると、登山道の両側に満開のツツジが咲き、思わず奇麗の連発。右上部を見上げれば5ｍ程はあろうかと思われるシロヤシオツツジの大木が並び「スゴイネー」の歓声をあげつつ進み、山頂下付近にさしかかった時に落葉松の間から富士山を望めました。酉谷山への分岐から、



折り返す途中にもシロヤシオツツジを見ることができ、手作りの小さな標識のある山頂へ到着。狭い山頂ですが眺望は素晴らしいです。石尾根の三ノ木戸～（後方に富士山）～六ツ石山～鷹ノ巣山～七ツ石山～雲取山が望めますよ！ 休憩後山頂を後に一杯水避難小屋へ向け出発。二つの岩場を越えると、なんとこの景色はスゴイの一言。ツツジのトンネルが待っていました。ミツバツツジ、シロヤシオツツジのオンパレード。スゴイのなんのこんなの見たことない！以前ツツジを見に来た時と比較にならない多さに大感激。写真を撮りまくりました。蕎麦粒山と一杯水避難小屋への分岐

から小屋への道も花は続いていました。私たちは、一杯水から蕎麦粒山へ向け、爽やかな気分で尾根北側に咲くツツジを見ながら歩き、蕎麦粒山を折り返し、棒杭尾根から倉沢林道へ下山しました。

昨年は花が少なかったため、今年は大いに期待できるのではないかと、わくわくしております。

（斉藤 全一）

～行って来たあよ　山のふるさと村～

落葉ふみと蕎麦打ち体験（H.18.12.12.火）

わぁ～真っ青な、ちょい寒の奥多摩駅９時３０分集合。一足早い年越しそば打ち体験。ネイチャートレイル歩きに出発。バスに揺られ山のふるさと村に３０分後に着いた。

まずは、人生初めてのそば打ち。きれいに手を洗い5人ひとグループに分かれ、道具が用意されている床暖房の部屋で始まった。北海道摩周湖で採れた新そば粉をこね鉢に。まぜる・こねる・のす・切る・簡単のようだが、これが難しい。そばを切り終えて細い太いありをグループごとに茹でてもらい、のどごし満足。そばつゆもおかわりして美味であった。

食卓には、治助イモの煮物や刺身コンニャク、粒あんぎっしりのまんじゅうなど胃袋満腹であった。

１２時３０分集合まで時間があり、メンバーは自由時間となりました。私はビジターセンター内に足を運びました。ドアに「薪ストーブが燃えています」の張り紙があり、室内に入るとやわらかい暖かさ懐かしい匂い。山の宝石箱を見つけた。食べると出る、動物の出るもの･･･うんちです。実物が箱の中に入っていた。キツネ・タヌキをはじめ、ウサギ・ムササビ・テン・シカは豆状で１ヶ所にするそうだ。ヤギと同じで見たことがあるウンチだった。形状と食べ物で動物を特定できるんだ。「へぇ～そうなんだ！」もう一つ、興味をもった発見です。

２本の棒を叩く拍子木。カシ・サクラ・ケヤキ・スギがあり全部打ってみた。どこかで聞き覚えのある音が一つ。相撲呼び出しさんが打つ、あの音はサクラの木だったのだ。「へェ～そうなんだ！」宝石箱と拍子木から学んだ事でした。

午後の光の中、ネイチャートレイルに出発です。風で舞う落ち葉を踏みながら歩くと、どこからか枯草のいい匂い。飛行機雲は真っ直ぐに伸びて、青い空に残る。気分は最高！キャンプ場方面の上り坂をゆっくりと歩く。針葉樹林や広葉樹林の間を進み、やがて、吊り橋があり下の渓谷を見ながら渡る。不思議な形をしたカエデの木が出現、根本は１本で途中２つに分かれて、それがまた合体して１本になり円形の空間ができていた。何でこんな木になってしまったの！岫沢（くきざわ）橋・日指（ひさし）橋・太子橋を渡る。この橋の名前は、昔あった集落を忘れないように橋の名前に残したそうだ。キャンプ場のメイン通りに出て、テントサイトで給水タイム。

三頭山方面の遊歩道に入り、左手に身長以上（一丈巾四尺）の石碑があり、聖太子と彫ってある。この石は、江戸時代に岫沢渓谷から一番大きな石を持ってこようと村中総出で引き上げようとしたが、次々と引き縄が切れてしまい動かなかった。そこで和尚に聞くと、女衆の髪と藤縄を編み込むと良い、と教えてもらい、大石を運び出すことができ、聖徳太子の供養塔になったそうです。また、聖太子の彫られた字の溝に酒を入れると、一文字に一升入るそうだ。そんな謎が隠れて彫られていたとは、確かめてみたいものだ。説明を聞き、旧加茂神社へ向かった。鳥居があったと思われる所に、石に穴の空いた対の苔むした残石があった。石段が歳月の風化で歪んでいた。建物は立派な社殿でした。ダム建設で湖底に沈んだ集落の氏神で鹿島踊り（1980 年国指定無形民俗文化財）は、毎年９月１５日に民俗芸能として加茂神社から小河内神社に合祀され奉納される。紅葉に色どられ、たたずむ旧加茂神社は凛として静かですばらしい。そこから日指の森の中へ。 カラマツ広場の坂を登り馬頭観音が坂の途中に二体あり、一つは転げ落ちていた。ラグビーボールほどの石だが、私の強力で持ち上げたら想像以上に重い！聖太子の石はさぞかし重かっただろうにと思った。落ち葉の中をかさがさと標高 600mまで登った。東屋で休憩。奥多摩の山脈や遠景は抜群で、まだ青い空が広がっていた。クラフトセンターの分岐から下り、５分でビジターセンターに降りた。まだ時間が早かったが目の前の高い山に日が落ちるのを眺めて「つるべおとし」だネ、と友達と寒さを感じた。太陽の暖かさは、なんともいえぬ温もりであった。

山ふるは夕暮れの中、バスで奥多摩駅に向かう途中、水と緑のふれあい館で、60 周年記念のダム竣工の展示を見た。そば打ち、食べ、自然に癒されながらの散策は、五感が満足するほど体が喜んでいた。満足！満足！

（会員　岩本　郁子）

～ 道程 ～

道がどこへつながるのか、誰がわかるだろう？私達は東京都心にほど近い所に住み、奥多摩へも時々訪れた。川苔山、棒ノ折山、峰谷地域、渓谷へ入り込み道から離れたり。ある日わさび田を発見した。誰がこんなにも急峻な尾根を上り下りして必要な道具や資材を運んだのか？なぜこんな事をしたのか？その理由を探るために、当時携わっていた雑誌にこの話を書こうと決めた。奥多摩わさび組合会長の竹内氏のご厚意により、わさび田での作業風景を取材。その事がきっかけとなり、各種イベントや集会に招かれ交流が始まった。

「人手が足りないんだ。皆歳をとり、若者は町を去って行く。人口減少だ」そこで考えさせられた。

このあたりに私達が、安く借りられる家はないか？川井へ引っ越して来たのは忘れもしない、そうあの大雪の冬、2014年。青梅線は1週間位動かないそんな中、地元の方からはこう聞かれた。「本当にこっちへ引っ越してくるつもりかい？」移り住んで大正解だ。友達の輪はどんどん広がった。故郷にいるような気持ちだ。

そして今までになく忙しい。ある日、友人達との散策中に自宅から遠くない谷合で、今は使われていないわさび田をみつけた。運良くそのわさび田を借りる事ができ、2015年から16年にかけての冬は、友人達の助けもあって苔取りや掃除、その後準備に追われた。わさび生産者の方々からのアドバイスもあり2016年初夏には1000本の苗を植えつけ、生育も上々だ。役場主催の1年半のわさび塾にも参加。最終的にはわさび組合にも加入した。また、奥多摩のボランティアガイドの活動を通して、樹木、灌木、花、鳥、動物、文化的な事や史実など、とても価値ある情報を得ている。

私は、オーストラリア人としてオーストラリアの茂みには慣れていたが、長年、北半球の環境の良さを理解できずにいた。特に不毛の杉の森には。そして冬の落葉樹は、ほとんど同じに見えた。枯れた枝のように。しかし、今は早春の小さな葉の芽やその他の変化を見分けられるようになった。今後はワクワクして春を迎えることになるだろう。

私達にとって奥多摩は何と素晴らしい冒険の地なのだろう。東京、そして世界の人達とこの素晴らしさを分かち合いたい。この感覚は都市生活とは全く違う。

多くの友人達もやってくる。地元の行事に関わり、季節のお祭りに参加し、自然環境の一部を大いに感じる。当然何かお返ししたい。という訳で、私達は地域が元気になるようなプロジェクトを模索中だ。テーマは、わさび、観光、森林再生。まずはわさびの輸出。ヨーロッパ、その後世界各国へと。すでに、オンラインで機能しているウェブサイトで奥多摩わさびの生産者誰もが、アクセス可能だ。こうすることで、地域活性化につながるのではと期待している。また、わさびの育苗も手がけたいと話合っている。地元のわさび生産者に一定の苗の供給ができるようになるからだ。森林再生とあわせて観光に力を入れる事は重要課題だ。

東京都内から、多くの登山者が奥多摩にやって来るのは、利便性が高い事。ただ、登山者の多くが杉林の中を何時間も歩くのは、退屈でつまらないと言う。春には新緑、秋は紅葉を求め東京から足を運ぶ。奥多摩に自生の木を植え直せば、人気のスポットになるはずだ。杉に覆われた山々は建材の大量生産のためであって、今はもう需要はない。趣味の大工仕事、家具制作、装飾的な木材などに将来的に産業を見据える。その産業は木を1本1本伐採するため、持続可能であり環境にやさしい。私達は、種々のオーク材、楓、桜、その他の自生の木々がよく育つ中、なんと素晴らしい多様性と安定した環境に恵まれているのか！

一方で、奥多摩に登山や散策に来られる方々にはお礼を申し上げたい。

さあ、これからどんな道を進む事になるのだろう。

（デイヴィッド・ヒューム）

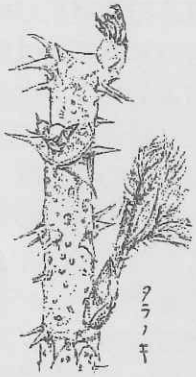
奥多摩樹木雑考

～春、小さき“生”三題～

風いまだ冷たき光の春から、やっと陽光のぬくもりを感じる季節になりました。木々の芽のふくらみに、“張る（春）”、はじけるように飛び出してくる草木の芽に、“はねあがる（Spring）”など言葉を遊びながら迎える春に心がはずみます。

“草山の　低き雑木が新芽ふく　枝のさきさきいのちかへり来”　（木下　利玄）

芽の開き方は、木々それぞれマイペースのようです。エゴノキが早くに褐色の毛でおおわれた冬芽から若い葉をのぞかせ始める頃、コナラやクヌギは褐色の芽鱗（冬芽を包む鱗片）にかたく身を閉ざしたままです。



花も葉も植物体の同じもとからつくられますが、花はさらに葉の一部が変化してつくられます。古里春日神社の神木でもあるイヌグス、（タブノキ）の冬芽が、花芽と葉芽がひとつの芽に納まっている（混芽）のはそのためでしょうか。

日当たりの良い林で、何者かに鋭利なナイフで頂芽を切り取られたタラノキを見かけました。それでも木は枯れずに、太い側芽が頭をもたげ、それにつられるように下の方から若い芽が吹きだしていました。己を維持しょうとするエネルギーが、無数のとげの強い存在感となっていました。

神社の境内などに植栽されたサクラの大木が、時折その幹から多数の若葉の束を吹き出しているのを見かけます（胴吹きといいます）。仰ぎ見ると樹冠の枝の密度が粗くなり、明らかに樹勢が衰えてきているのがわかります。サクラは弱った樹冠での光合成のはたらきを補うために新しい葉をつけようとしているのでしょうか。

春は種の保存のための木々のあくなき“生”のかたちを見せつけられる時です。

（橋上　一彦）

奥多摩の野鳥

～ウグイスと初鳴き～

（ウグイス：スズメ目　ウグイス科　ウグイス属　漂鳥）

日本の三名鳥といえば、ウグイス、オオルリ、コマドリが数えられています。特にウグイスは、その筆頭にあげられています。鳴き方の素晴らしさも勿論ですが、春、身近で真っ先に鳴き出すためではないでしょうか。春つげ鳥ともいわれていますね。

この鳥の鳴き声を知らない人はいないでしょうが、その色彩となると案外知らない人が多いのではないでしょうか。あのくすんだ緑色はけっしていい色とはいえませんが、枝から枝へ敏しょうに動きまわる姿は、なかなかのもので見ていても飽きることがありません。もっともヤブの中や枝から枝へ移動しますので、見続ける事はむずかしいですが、ウグイスは秋、10月頃に山から里に降りてきて冬、山里でくらし、翌春３月下旬から４月上旬頃、再び山に繁殖のために帰っていきます。さくら前線という言葉を気象庁が発表しているのをお聞きになる事があると思いますが、ウグイスもその初鳴き日を観測しているようです。

画　大澤新次

奥多摩では、２月下旬から３月中頃にかけて初鳴きが聞かれるようです。年によってばらつきはあるようですが、北海道では５月頃になるようです。

さて、うぐいすは何を基準にして初鳴きを始めるのでしょうか。気温でしょうか。木の芽、草の芽の動きでしょうか。それとも日照時間でしょうか。おそらく、日照時間に敏感に反応して、初鳴きを始めるようだといわれています。

ところで、昔から「梅にウグイス」という描写をよく目にしますが、ウメによく来る鳥は、ウグイスではなく美しい緑色をした目のまわりの白いメジロのようです。ウグイスが「ホーホケキョ」と鳴き出しますと、いよいよ春がやって来ます。

（畑　幸夫）

春から夏　奥多摩山歩き
～ イベント案内　5月から8月 ～

No.5　5月 7日（月）　御嶽山奥の院のシロヤシオ
No.6　5月 9日（水）　川苔山足毛岩のシロヤシオ
No.7　5月 23日（水）　天目山（ミツドッケ）
No.8　5月 31日（木）　奥多摩いこいの路
No.9　6月 6日（水）　笠取山（シャクナゲ）
No.10　6月 12日（火）水根山（標高 1620m）
No.11　6月 14日（木）柳沢峠から新緑の水源林
No.12　7月 17日（火）本仁田山（標高 1224.5m）
No.13　7月 19日（木）奥多摩の名瀑（百尋の滝）
No.14　8月　9日（木）鶏冠山（黒川鶏冠山）

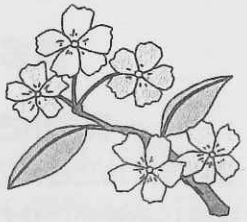
小河内ダム（奥多摩湖）完成から60年　その4

昭和6年5月小河内ダム建設計画が地元住民に説明された。小沢市平村長は苦渋の決断、反対する議員を説得した。昭和7年10月調査測量も終了し工事が始まるものと思いきや、稲城・川崎二ヵ嶺用水のある神奈川県の反対で工事が出来なかった。小沢村長は何度となく東京市の担当者に「早く工事を始めてくれ」と湖底に沈む住民の苦悩を訴えたが一向に始まらない。そしてついに昭和10年12月小河内村の村民は小菅・丹波山村と手を握り合って、むしろ旗を持って起ちあがった。そして、昭和11年3月ようやく内務省の裁定案が示されその調停がまとまった。実に5年もの期間を経過していた。

昭和11年小河内貯水池建設事務所開設、13年起工式を迎えることが出来た。18年戦争による一時中断そして敗戦、第一次離村者も生きるためにまた、戦争疎開で故郷へ帰る。そして、先に買い上げられた農地の耕作を始めた。昭和23年工事再開。しかし村民は再び故郷を離れたくなかった。おりしも農地解放の制度が公布されたこともあり、工事再開反対の陳情をする。しかし、それも空しく工事は再開され、そしてついに昭和 32 年 11 月ダムは完成した。移転家屋945世帯、工事による殉職者87名の尊い犠牲のもと建設計画が発せられてから実に26年の歳月が過ぎていた。小河内ダム湛水（たんすい）は昭和32年6月6日、午前7時20分、都知事の合図で水をため始めた。しかし、33年は異常渇水、貯水半ばで放流、初めて満水になったのは、2年後の34年5月のことでした。

参考資料「湖底の村の記録」奥多摩湖愛護会

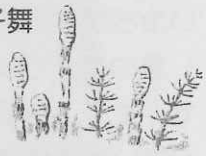
奥多摩地域情報局



4月14,15日
- 山のふるさと村「春祭り」
- 水と緑のふれあい館　春のミニコンサート

4月29日（日）
- 奥多摩セラピーウオーク（むかし道）
- 小丹波「小丹波のお囃子」熊野神社

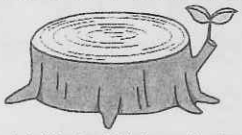
5月5日（土）　川井　八雲神社獅子舞



奥多摩の林業

東京都の森林組合は昨年三宅村森林組合が解散し、現在木村康雄氏が組合長の東京都森林組合の1組合となり業務範囲は東京都一円に拡大しました。

日本の 67%は豊かな森に囲まれています。東京都でも全体の 30%以上は森林です。日本の林業衰退の最大の要因は、木材価格の低迷にあると思います。現在国産材の丸太価格は昭和 55 年をピークとして下がり続け、20 年前と比べても3分の1程度で多摩木材センターの市場で 1 ㎥あたりスギが1万円前後、ヒノキにしても1万2千円から2万円ぐらいだそうです。



下の写真はむかし、林業家が杉の皮をむくときに使った道具です。家の屋根を葺くために皮まで商品になったんですね。

下のケース

右の写真は今も残る 杉皮

次号発行予定：平成30年7月15日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会
hppt://www.okutama.gr.jp/